

社会構造論2005

現代日本の宗教社会学における
調査研究の動向

戦後日本の宗教社会学

- 西欧の文化・社会理論の影響を強く受けてきた：ウェーバーの『宗教社会学論集』デュルケムの『宗教生活の原初形態』
- 理論的な面では、世俗化論争が学会のトピック（見えない宗教、市民宗教等々）
- 実証的宗教社会学：宗門の本末関係及び新宗教の本部支部関係进行分析した森岡清美；
- 1980新宗教の多角的調査研究『新宗教事典』

- 1990 新靈性運動(ニューエイジ、精神世界)
- 現代宗教社会学の研究課題:
 - 1 既成宗教(仏教、神道、キリスト教)と新宗教の教団組織、
 - 2 教団形成と地域社会との関係(移入と土着)、
 - 3 戦後日本社会の変動と宗教文化の変容(世俗化、再活性化)
- 「聖なるもの」が顕現する状況や宗教体験そのものよりも、宗教的情動を作動させる社会関係、社会構造の解明が目指された

方法論的革新

- 1 1980-90 教えや信仰の形成に関わる「内在的理解」が強調された：宗教者自身の内面や語りに即して、彼等の「信心の所在」を記述
- 当事者、地域に即したエスノグラフィー；ライフヒストリーによる研究者と対象者との共同主観的な社会的・歴史的リアリティの叙述
- 戦後の新興宗教批判 外在的批判を避ける

- 2 構築主義的言説・社会分析
- 入信・回心という信者の精神史的事実が回心の物語の中で常に創造され、更新されているという認識：入信動機や入信の背景を信者のライフヒストリーから研究者が探るといった従来の「事実発見型」調査研究は意義を失った。
- 自己物語が構築される社会的文脈（教団の教化戦略、教団と社会との緊張関係）の研究
- 櫻井が「信仰の組織的構築」や「社会問題としてのカルト問題」を研究

「靈能」の物語分析

- 秋庭裕・川端亮著『靈能のリアリティへ - 社会学、真如苑に入る -』新曜社。
- 真如苑は、伊藤信乗、伊藤友司夫妻により昭和11年立正閣として設立され、13年真言宗醍醐派立川不動尊教会、23年まこと教団、26年に現在の真如苑に改称。
- 1970-80年代に大きく成長し、信者数84万6千人余りの中規模な新宗教教団
- 靈能(相承者)618人のアンケート調査と、インタビュー調査

- 大般涅槃經を教義の核にすえ、
- 信者が靈能者を鏡として自己を映し出し、靈言をいただく「接心」が特筆すべき儀礼
- 信者の位階・権能：大乘・歡喜・大歡喜・靈能
- 厄災の原因を因縁や靈の障りに求め、回向・施餓鬼・護摩を行う。
- 「觀喜(布施)」「お助け(布教)」「奉仕(勞力提供)」の3つの「あゆみ(実践)」が重視される。
- 真如苑では、様々な困難の原因を接心によって気づかされ、靈能の向上を目指し、3つのあゆみに余念のない生活が目標になる

- 1 物語論的分析
- ミメーシス1 解釈が依拠する自然や社会に関わる先行理解(物語を語る素材群) 信者は自己の信仰形成を語る際に、どのような基本的概念を有しているか。
- ミメーシス2 経験をテキストに加工する構築プロセスであり、先行要素を使いながら、出来事の間筋立てすることである(物語のストーリー、素材同士の有機的連関) 信者は信仰をどのように語るのか。基本的な筋書きと用いられる概念の関連。
- ミメーシス3 解釈のプロセスにより物語を理解する(物語を理解する、研究する) 体験談に聞き入る信者は物語をどのように理解し、研究者がどのように解釈するか。

「靈能」をめぐる議論

- 永井美紀子 『宗教と社会』11号(2005)
- Q 真如苑でいうところの「誰でもなれる靈能者」が実際は信者の0.1%程度であるところから、永井は、「靈能」に特異な属性的能力を考えるべきではないか
- A 秋庭・川端： 靈能とは靈位向上を目指した耐えざる教えの経験的・実践的学習成果を踏まえた上での靈言を与える能力。従って、人格陶冶の果てに倫理的な宗教人となれば靈能は自ずと備わるという教団の教えに沿った靈能者像を提示

- 1 真如苑でいう霊能とは、第六感による予知や特異な宗教的霊験による操霊技法ではなく、接心場面における参座者(参加者)と霊能者間のコミュニケーション
- 2 霊能の開発、認定は教団により統制(霊能者の霊能相承に要した期間:1970年まで平均、1990年では17.16年。霊能相承が教団の組織的要因(信者数の増加、相承会座参加者・開催地の限定、制度変革)に左右される

第二の疑問として、真如苑が1970年代後半以降コンスタントに信者数を伸ばした理由は何か

- A 戦後の日本社会が実態以上に業績主義イデオロギーに囚われ、戦後生まれの新宗教も現世利益と現世内禁欲的勤勉主義の通俗道徳で多くの人々を教化し、信者としてきた。
- 真如苑は、霊能を個人的属性から組織が管理するコミュニケーション能力という資格に変換していき、信者誰もが挑みうる信仰の高みとして達成原理を導入することに成功した。

真如苑の教えの参照能力や宗教的儀礼の場 におけるコミュニケーション能力が、「霊能」

- 霊能者の年齢構成 (26~39歳11.7%、40歳代24.1%、50歳代31.8%、60歳代27.9%、70~81歳4.5%)
- 学歴構成 (義務教育程度6.2%、高卒程度47.1%、大卒程度46.8%)
- 年間の世帯収入 (300万円未満4.1%、300~600万円未満17.7%、600~900万円未満23.4%、900~1200万円未満20.8%、1200~1500万円未満10.0%、1500万円以上23.9%)

秋庭・川端は、確立された信念体系とそこで実践する倫理的主体としての霊能者像を提示

- 「霊能力者はface to faceの接触を通じて教団の教義を信者に内面化させ、ひいては信者をも含む教団全体の凝集性を高めてゆくところの変化エージェント (change agent)
- 変化エージェントは教団内で、様々な教義的、組織的制約の中で育成され、かつ行動する存在故に、その性格は体制的であり、信者の態度をさらに強く体制(教団)へ結びつけるという特徴を持っているのである。(白水, 1978:89)」

- 一般信者にとって霊能者は接心修行における重要な媒体であるにもかかわらず、信者の感謝を受けることがなく(霊能者は不特定多数の信者に真如霊界より霊言を取り次ぐ)、信者の感謝は教祖一家(伊藤信乗・友司の双親様、天逝した2名の男児の両童子様)に収斂していくことを指摘している。
- 真如苑の霊能者が保有する霊能とは、本人に内属する能力や力の発現ではない。秋庭・川端はそれを倫理的洗練と捉え、白水は従属性を考える。

「靈能」のクオリアはどこにあるか

- 靈能者：信者数の0.1%、トップ・エリート
- 彼等の信仰物語は多くの信者が目指す模範だから、靈能者の信仰を描き出せば、真如苑の靈能が理念型として描き出せる
- しかし、99%の信者達の信仰物語は、果たして靈能者への途上にある信仰形態？
- 秋庭・川端：代表的事例から「靈能」の質感を描き出してみた　しかし、永井・白水と異なる

自己物語、ナラティブ分析の限界

- 信仰の自己物語：有意味な世界を主観的に語る；現時点において重要ではない出来事は語られない；語りは幾つものバージョンを経て極めて強いメッセージ性や体系性を持つ；人生の岐路において全く別の物語に変質
- 一時点の調査で回顧的信仰形成を聞き取りしても、信仰の契機は不明、意義付けのみ判明：パネル調査、イベントヒストリー

研究者が物語ることの政治性

- 三土修平1987『水ぶくれ真如苑 - 急成長の秘密と欺瞞の構図』AA出版。
- 「人を救ける功德によって自分も救われていく」という教義的教えが、人を救けた実績に応じて救いの確証が得られるという実践的教えに転換される。その結果、信仰的確信を得ていない信者が即座に布教者になり、その布教者が同じような信者を増やして、末広がりのピラミッド構造ができあがる。

- 霊能の開発方法と布教戦略がシステム化していった時期以降、1980年代に霊能者を目指して一般信者はお救けの活動に邁進していった。
- これを動員と見るのは教団組織論の立場であり、
- 信者の主観的理解では自ら信仰の発露として行ったことである。
- 秋庭・川端の調査データの通りである。そのデータに基づいて真如苑を語れば、倫理的霊能への道筋を歩む信者の群となる。

- 学問的に客観的であることと、対象に対して客観的であることには距離がある。
- 真如苑の教団としての発展過程、霊能者の形成システム：秋庭・川端の研究と永井、白水、三土の研究をつきあわせて見てもそれほど相違はない。
- しかし、真如苑の教団像を一言で読者に提示するとどうなるかという点で、倫理、呪術、統制、ピラミッド・システム等様々な評価に分かれてくる。
- それぞれの視点を提示することで、語るものは教団に対する社会的評価というミメーシス³を形成することに一役買う

社会調査、社会学の政治的実践性

- 物語、ナラティブ、社会構築主義の課題とは、研究方法の革新だけに目を奪われず、調査研究の政治的実践性にも想像力を広げる。
- 調査対象の教団、信者の当事者性に配慮し、彼等の物語を誠実に研究として語り直す 新宗教研究やスピリチュアリティの研究、しかし、カルト問題では不具合が出る！ そうではなく、社会調査ではすべからく、対象者との関係性を構築していく実践性を持つのである。